

# 産業ビッグデータアプリケーションモデルを用いた RDBMS と NoSQL の電力効率の初期比較 A Preliminary Comparison of Energy Efficiency between RDBMS and NoSQL using an Industrial Big Data Application Model

西川 記史<sup>♡</sup> 高田 実佳<sup>△</sup> 茂木 和彦<sup>◆</sup>  
早水 悠登<sup>\*</sup> 合田 和生<sup>♡</sup> 喜連川 優<sup>◇</sup>

Norifumi NISHIKAWA Mika TAKATA  
Kazuhiko MOGI Yuto HAYAMIZU  
Kazuo GODA Masaru KITSUREGAWA

IoT や AI 技術の利用の拡大に伴うデータセンタのエネルギー消費の急増により、データセンタが提供する IT サービスの性能の維持と IT 機器のエネルギー消費削減の両立が求められている。しかし、IT サービスはそのシステム実装形態により提供できる性能やエネルギー消費が異なるため、それら両方を考慮した実装の選択は IT システム設計者にとって困難な問題である。本研究では、データセンタの主要なアプリケーションである IoT サービスの実装の選択を容易化するために、産業ビッグデータアプリケーションのベンチマーク手法として提案されているアプリケーションモデルを RDBMS および NoSQL を用いた異なる IT システム上に実装し、それらの性能と消費エネルギーを計測しエネルギー効率を Application Platform Energy Effectiveness (APEE) を用いて比較する。これにより異なる実装における IoT サービスのエネルギー効率を計測・比較が可能となる。この結果、IoT サービスの性能とエネルギー効率の双方を考慮した実装の選択が容易になり、IT サービスの性能を大幅に損なわないデータセンタのエネルギー効率向上に貢献できる。

According to the expansion of the IoT and AI technologies, the amount of energy consumption at a data center has increased rapidly. Thus, it is required to manage both maintaining performance of IT service and saving energy consumption of IT equipment. However, performance of IT service and energy efficiency of IT equipment are likely to require different implementation. Then, an appropriate selection

of the implementation is a challenge for IT system designer. In this research, we make preliminary comparison of energy efficiency of IoT service using Application Platform Energy Effectiveness (APEE).

## 1. はじめに

IoT や AI 技術の利用の拡大に伴うデータセンタのエネルギー消費の急増により、データセンタが提供する IT サービスの性能を維持しつつ IT 機器のエネルギー消費を削減することが求められている。LBNL のレポートによれば、米国のデータセンタでは省電力技術が採用されつつあるが、それにも関わらず米国のデータセンタの消費電力は 2014 年から 2020 年にかけて年率 4% で増加し、2020 年の消費電力は 73 billion kWh に達すると予想されている [1]。また、米国 DOE のレポートでは、IT 負荷が 100 kW 以上のデータセンタのエネルギー使用量を、5 年以内に 25% 削減するとしている [2]。

IT サービスは、実装によりその性能やエネルギー消費が変化する。例えば文献 [3] では、ストレージ内のデータ配置を変更することにより、若干の性能低下はあるもののストレージの消費電力を最大 60% 以上削減できることが、文献 [4] では RDBMS のアクセスパスにより IT 機器の消費電力が異なることがそれぞれ示されている。このように、IT サービスの性能とエネルギー消費の双方を意識した実装の選択は困難であり、その容易化が課題である。

産業アプリケーションの性能を比較するツールとして、標準ベンチマークが多数提案されている [11, 12, 22, 23, 24, 25, 26, 27]。これらは单一あるいは少数のコンポーネントの性能を計測するものであり、IoT システム全体の end-to-end の性能を計測するものではない。また、データセンタのエネルギー効率の計測のための指標として PUE[5] や REF[6], ITEESv[7] などが標準化されている。これらの指標は、データセンタの設備や IT 機器のエネルギー効率を計測するためのものであり、IT サービスの性能については考慮されていない。

本論文では、IT サービスの性能とエネルギー効率の双方を意識した実装の選択を容易化することを目的に、産業ビッグデータアプリケーションのベンチマーク手法 [9] として提案されているアプリケーションモデルの異なる実装を対象に、それらの性能と消費エネルギーを計測する。そして、それらの間のエネルギー効率を、サービス視点のエネルギー効率を計測する指標である Application Platform Energy Efficiency (APEE) [8] を用いた比較が可能であることを示す。これにより、IT サービスの性能と消費エネルギーが計測できること、及び APEE によりアプリケーションの実装の差異によるエネルギー効率の違いを評価できることを示す。この結果 IT サービスの性能とエネルギー効率を意識した実装の選択が容易化され、IT サービスの性能を大幅に損なわないデータセンタのエネルギー効率向上への貢献が可能となると期待される。

本論文の構成は以下の通りである。まず、第 2 章で産業ビッグデータアプリケーションモデルについて、第 3 章でエネルギー効率の計測指標である APEE についてそれぞれ述べる。次に、第 4 章において産業ビッグデータアプリケーションモデルを用いた IT 機器のエネルギー効率の比較とその結果について、第 5 章においてどの程度まで APEE の向上が可能であるかを議論する。その後、第 6 章において関連研究について述べ、最後に第 7 章において全体をまとめる。

## 2. 産業ビッグデータアプリケーションモデル

本章では、まず我々が計測に用いた産業ビッグデータアプリケーションのモデルの概要を述べる。当該モデルは、鉱山の露天掘りにおける工事車両管理アプリケーションにおける問合せをモデル化したものである。詳細は文献 [9] に詳しい。本アプリケーションモデルは、鉱山の露天掘りの現場業務からそのバックオフィス

♡ 正会員 株式会社日立製作所研究開発グループ  
[norifumi.nishikawa.mn@hitachi.com](mailto:norifumi.nishikawa.mn@hitachi.com)  
△ 正会員 株式会社日立製作所研究開発グループ  
[kazuhiko.mogi.uv@hitachi.com](mailto:kazuhiko.mogi.uv@hitachi.com)  
◆ 非会員 Hitachi America, Ltd. Research & Development Division  
[mika.takata@hal.hitachi.com](mailto:mika.takata@hal.hitachi.com)  
▲ 正会員 東京大学生産技術研究所  
[haya@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp](mailto:haya@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp)  
♡ 正会員 東京大学生産技術研究所  
[kgoda@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp](mailto:kgoda@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp)  
◇ 会員 東京大学生産技術研究所、国立情報学研究所  
[kitsure@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp](mailto:kitsure@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp)

表 1: クエリの概要

クエリ種別	クエリ概要
KPI 計算	•操作管理者向け KPI 計算（集計） •ウィンドウ幅: Sliding, Landmark 及び Tumbling
イベント検知	•フロントオペレータ向けイベント検知
分析	•企業幹部・バックオフィスのスタッフ向けの分析・予測クエリ

業務まで幅広いクエリを含む。

## 2.1 データライフサイクル

文献 [9] が示す産業ビッグデータアプリケーションのモデルは、図 1 に示す 3 つのデータライフサイクルを有している。最外周のサイクルは戦略サイクルであり、企業幹部やバックオフィスのスタッフが、エンタープライズデータハウスに蓄積されたデータを対象に長時間（日～月）を要する意思決定を行なう。TPC-H [11] や TPC-DS [12] のような従来のアプリケーションモデル（ベンチマーク）は、この最外周サイクルのみを対象としたものである。産業ビッグデータアプリケーションモデルでは戦略サイクルに加え、中央のサイクルである日々のオペレーションサイクル、及び最内周のサイクルである制御/操作サイクルを新たに設けている。日々のオペレーションサイクルで実行されるクエリは、作業量を計測する指標であるオペレーションサイクル数やトラックの移動距離などの KPI を一定時間毎にオペレーションマネージャが確認し、それらに基づき意思決定を行なうことを想定したものである。制御サイクルで実行されるクエリは、効率的な現場リソースの管理のための現場の状態をリアルタイムに変更することが目的であり、イベントの監視や異常値の検出などの業務を行うことを想定している。

## 2.2 データ概要

産業ビッグデータアプリケーションで使用されるデータは、産業機器などから取得するオペレーションナルデータとビジネスで使用されるビジネスデータの 2 種類がある。オペレーションナルデータには、GPS データや現時点の産出量などのようにローダーやダンプ、トラックなどの装置に取り付けられたセンサが出力するセンサデータと、装置の状態を示すイベントデータがある。ビジネスデータには装置の属性やビジネスプロセスなどがある。

センサデータは定期的（例えば 5 秒間隔）にデータセンタ側のサーバに送信され蓄積される。イベントデータは装置の状態が変化する毎にセンタに送信され蓄積される。装置の状態の継続時間は数十秒から數十分であるため、イベントデータは時系列データではあるがセンサデータと比べて少量である。ビジネスデータはイベントデータやセンサデータと比較すると非常に少ない。

## 2.3 クエリ概要

提案手法の具体的な内容について述べる。産業ビッグデータアプリケーションには、前述の 3 種類のデータライフサイクルに対応した 3 種類のクエリが定義されている。表 1 にその概要を示す。

KPI 計算クエリは、日々のオペレーションサイクルに対応するクエリであり、オペレーションマネージャが定期的に KPI を計算することを想定している。KPI 計算には sliding, landmark 及び tumbling の 3 種類のウィンドウがあり、毎分等定期的に実行される。イベント検知クエリは最内側のサイクルである制御サイクルに対応するものであり、検知されたイベントは現場リソース管理に使用される。これらのクエリは直近のデータに対するクエリであり、また短い応答時間が求められるため、一般的にストリームデータ処理基盤で処理される。

分析クエリは最外周の戦略サイクルに対応するクエリであり、状態やイベントの予測、最適化などを含む。これらのクエリは企業幹部やバックオフィススタッフが使用するものである。戦略サイクルにおける意思決定の頻度は日々～毎月一回程度である。分析ク

エリは過去のデータを対象とした長時間のクエリであるため、一般的に RDBMS や NoSQL などのデータ蓄積基盤で処理される。

## 3. Application Platform Energy Effectiveness (APEE)

Application Platform Energy Effectiveness は、ある IT サービスにおける IT 機器のエネルギー効率を計測する指標であり<sup>1</sup>、以下の式で表される [8]。

$$APEE = \frac{ApplicationOutcomePerHour}{EnergyConsumptionPerHour} \quad (1)$$

ここで、ApplicationOutcomePerHour（以下アプリケーションアウトカムと呼ぶ）とは、作業計画の調整を判断する上で必要な情報を抽出するために実行する一連のクエリが単位時間当たりに完了する回数である。EnergyConsumptionPerHour（以下エネルギー消費と呼ぶ）はその一連のクエリを完了させるために IT 機器が消費した単位時間当たりのエネルギー量である。例えば TPC-H を例とすると、TPC-H の性能指標である QphH をアプリケーションアウトカムとして用いることができる。

## 4. 産業ビッグアプリケーションモデルを用いた IT 機器のエネルギー効率の比較

### 4.1 計測方法

#### 4.1.1 計測対象

データセンタにおいてデータ分析処理サービスを行う場合、その実装に用いる IT 機器としては、デスクトップ PC から数十コアの CPU を搭載する大型のサーバとエンタープライズストレージを用いる構成まで様々なものが考えられる。また、データ分析に使用されるデータ処理ソフトとしてはこれまで RDBMS が一般的に用いられてきたが、近年では Hadoop や NoSQL などの非 RDBMS データストアが多く用いられるようになってきている。そこで、本論文では産業ビッグデータアプリケーションモデルを以下の構成で実装し、それぞれの構成のアプリケーションアウトカムと消費電力量を計測し、これら両者の計測値から Application Platform Energy Effectiveness (APEE) を計算することで両者のエネルギー効率を求ることとした。

- デスクトップ PC + RDBMS
- デスクトップ PC クラスタ + Hive/Hadoop
- エンタープライズサーバ + ストレージ + RDBMS
- PC サーバクラスタ + Hive/Hadoop

#### 4.1.2 評価に用いるクエリ

評価には、前章にて述べた産業ビッグデータアプリケーションモデルに定義されている分析系クエリを用いることとした。これは、KPI 計算及びイベント検知は主にストリームデータ処理基盤で実行される処理であり、データ蓄積基盤のエネルギー効率比較には適さないと考えたためである。文献 [9] に示されている分析系クエリは、表 2 に示す 5 種類である。なお、文献 [9] にはクエリの実装や分析に用いる手法は記載されていないため、表 2 に示す実装及び予測手法を用いることとした。

#### 4.1.3 アプリケーションアウトカムの定義

APEE を用いた比較を可能とするために、産業ビッグデータベンチマークモデルのアプリケーションアウトカムを定義した。文献 [9] に示されている分析系クエリの評価指標はクエリの応答時間である。そこで、Q5 から Q9 までの処理を直列に実行し、Q5

<sup>1</sup>当該指標は現在 ISO/IEC JTC 1/SC 39 にて国際標準化提案中である。

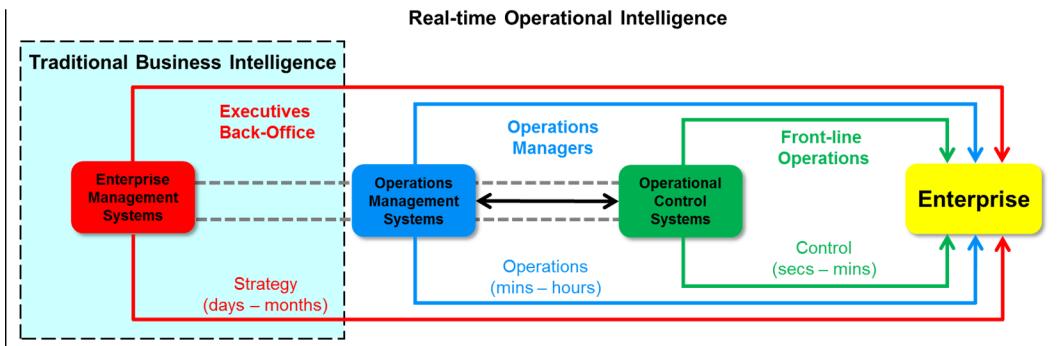


図 1: 産業ビッグデータアプリケーションのライフサイクル

表 2: 分析クエリ概要と実装

#	クエリ概要と実装
Q5	シフト終了時の生産量が目標値を満たしているかを予測 単調増加するセンサ値のシフト終了時の値を線形回帰を用いて予測する
Q6	最も高価な車両の利用率を最大化する車両配置の計算 車両のローダへの到着率とローダのサービス率を求め、車両の平均待ち時間が一定値以下となるように車両をローダに配置する
Q7	類似センサ値との比較による故障したセンサの検出 センサ値の統計情報をクラスタリングし、故障したセンサを検出する
Q8	$t$ 時間以内に保守が必要になる装置の予測 単調増加するセンサ値が、 $t$ 時間以内に閾値に達するか否かを線形回帰を用いて予測する
Q9	保守時に取るべきアクションの推薦 保守に入るまでのセンサ値の推移と最も似ている過去の（保守に入るまでの）センサ値の推移を求め、その時行われた保守のオペレータノートを求める

表 3: デスクトップ PC + RDBMS

機器	概要
PC	CPU: 8 論理コア/socket × 2 socket (16 物理コア) Intel®Xeon®W5580 CPU @ 3.20GHz Memory: 16 GB HDD: 7.2 k rpm 2 TB SATA × 4 台 OS: CentOS 7.2
電力計	横川電機 CW121 クランプ電力計

表 4: デスクトップ PC クラスタ + Hive/Hadoop

機器	概要
クラスタ	ノード数 4
インターネット	Cisco SF100D-16 (1Gbps)
ノード	CPU: 4 論理コア/socket × 1 socket (4 物理コア) Intel®Core™i5-3470 CPU @ 3.20GHz Memory: 4 GB HDD: 7.2 k rpm 450 GB SATA × 1 台 OS: CentOS 7.2
電力計	横川電機 CW121 クランプ電力計

から Q9 までの処理の 1 時間当たりの処理回数を一時間当たりのアプリケーションアウトカムと定義した。

#### 4.1.4 ハードウェア及びソフトウェア構成

前述の 4 種類のハードウェア構成をそれぞれ表 3, 4, 5 及び 6 にそれぞれ示す。

ソフトウェア構成は次の通りである。RDBMS として、商用の

表 5: エンタープライズサーバ+ストレージ+RDBMS

機器	概要
サーバ	CPU: 12 物理コア/socket × 2 socket (24 物理コア) Intel®Xeon®CPU E5-2690 v3 @ 2.60GHz Memory: 256 GB OS: RHEL 6.6
FC	8 Gbps Fibre channel × 4
ストレージ	15 k rpm 300 GB SAS × (256 + 8) 台 ((7D + 1P) × 32 RG + 8HDD spares) DB を (7D + 1P) × 32 RG 上に構築 (表&索引: 31 RG, ワーク: 1RG)
電力計	横川電機 WT1800

表 6: PC サーバクラスタ + Hive/Hadoop

機器	概要
クラスタ	ノード数 128
インターネット	Dell Force 10 Z9000 (10Gbps)
ノード	CPU: 8 物理コア/socket × 2 socket (16 物理コア) Intel®Xeon®E5-2680 CPU @ 2.70GHz Memory: 64 GB HDD (OS) : 15 k rpm 300 GB SAS × 2 台 HDD (Data) : 10 k rpm 900 GB SAS × 24 台 OS: RHEL 5
電力計	Ralitan インテリジェントラック PDU

RDBMS である Hitachi Advanced Data Binder version 03-06 (HADB) [13] を、Hive/Hadoop として Apache Hadoop [10] やび Apache Hive [14] をそれぞれ用いた。RDBMS 実装では JDBC 経由で SQL により DB からデータを取得し、Apache Spark [15] 上で計算を行った。Hive/Hadoop の実装では、HDFS 上に構築した Hive 形式のデータベースから、Apache Spark の Spark-SQL 経由でデータを取得し、Spark 上で計算した。クエリ Q5, 7, 8 には Apache Spark の MLlib を、Q9 は時系列データ間の距離を計算するために Dynamic Time Warping (DTW) をそれぞれ用いた。

#### 4.1.5 データ

本評価で用いたデータは、鉱山の露天掘りにおける工事車両の動きを模したシミュレータにより生成した。シミュレーションに登場する装置は土砂あるいは鉱物資源等をトラックに積み込むローダ、土砂あるいは鉱物資源を運搬するトラック、土砂あるいは鉱物資源を降ろすダンプ、の 3 種類である。シミュレータでは、トラックがローダで資源等を積み込み、それをダンプの場所まで運び、空になったら再度ローダに行き、資源等を積み込むサイクルを繰り返している。ローダ及びダンプには生産量の累積値を計測

表 7: シミュレーションパラメタ

#	Parameters	Values
1	# of activities of hauler	6
2	# of activities of loader	4 (one is idle)
3	# of activities of dump	4 (one is idle)
4	# of maintenance event for hauler (maintenance 1, 2)	2
5	# of maintenance event for loader	1
6	# of maintenance event for dump	1
7	# of field sensor per loader/dump pair	20
8	# of equipment sensor per hauler	1 (total carried object weight)
9	# of object sensor per hauler	1 (load weight per shift)
10	# of GPS sensor per hauler	1
11	# of field sensor per loader/dump	1 (includes #7)
12	Distance of two field sensors	90.5
13	Moving equipment max speed	8 (randomly selected, equal or less than 8) per 5 sec
14	Load 1 & 3 event length	Load1 = 30 sec, Load3=15 sec
15	Dump1 & 3 event length	Dump1 = 20 sec, Dump3=35 sec
16	Load weight	>0, 10 x (2 + Gauss distribution (mean 0.0, standard deviation 1.0)) value of load weight sec
17	Load2 & dump 2 length	1/300
18	Hauler skip dump frequency (for event detection 4a)	1/100
19	Hauler skip specified field sensor frequency (4b)	Total moved distance exceeds 100,000
20	Hauler maintenance 1 occurrence condition	Total weight exceeds 900
21	Hauler maintenance 2 occurrence condition	One hour to one day (randomly selected)
22	Length of maintenance	

するセンサが、トラックには積載量の累積値、移動距離の累積値、現在位置を示す GPS センサがそれぞれ取り付けられており、一定時間間隔でデータを送信する。また、ローダとダンプの間には複数のフィールドセンサ (Beacon) が置かれており、近くに来たトラックの ID を送信する。ローダ、ダンプは累積の生産量が一定値を超えたたら、トラックは累積の積載量または累積の移動距離が閾値を超えると保守モードに入る。

本評価で生成したデータに含まれるローダ・ダンプの数はそれぞれ 100、トラック数は 2,000 台であった。これは、車両の代理店一店舗の規模に相当する [28]。CSV テキスト形式で約 550 GB であり、イベント・センサデータの小規模表は約 1,800 万行、中規模表は約 3 億行、大規模表約 30 億行であった。その他のパラメタの詳細は表 7 に示す通りである。

次に、シミュレーションにより生成したデータの傾向を示す。表 8 は トラック、ローダ、ダンプそれぞれのアクティビティ (イベント) とその長さを示している。#1–6 は トラックの、#7–10 は ローダの、#11–14 は ダンプのイベントである。#15–18 は トラック、ローダ、ダンプの保守イベントである。表 9 は 保守イベントの間隔を示している。Hauler maintenance 1, hauler maintenance 2, loader maintenance 及び dump maintenance の平均間隔は、それぞれ 467.1 時間、540.6 時間、100.7 時間、110.2 時間であった。

#### 4.2 IT 機器のエネルギー効率の初期評価

アプリケーションアウトカムの計測は、前述のクエリ Q5 から Q9 までを単一スレッドで直列に連続で一定時間実行し、その間に処理できたクエリの数を計測することにより行う。IT 機器の消費エネルギーは、前述のクエリ Q5 から Q9 を実行している間のサーバ及びストレージの消費電力量から求める。

図 2 に、産業ビッグデータアプリケーションの性能と消費エネルギーの計測結果、及び APEE の比較結果をそれぞれ示す。APEE は式 1 に示すように、単位時間当たりのアプリケーションアウトカムを単位時間当たりの消費エネルギーで除した値である。

図 2 (a) から分かるように、アプリケーションアウトカムはそれぞれデスクトップ PC+RDBMS が 1.04、デスクトップ PC クラスタ+Hive/Hadoop が 0.99、エンタープライズサーバ+ストレージ+RDBMS が 15.86、PC サーバクラスタ+Hive/Hadoop が

表 8: Event time length (sec.) .

#	Event	Max.	Min.	Avg.
1	Queuing at loader	87,027	0.0	2,548
2	Loading	119	46	65
3	Hauling Full	1,745	1,276	1,483
4	Queuing at Dump	12,688	0.0	749
5	Dumping	129	56	75
6	Hauling Empty	2,433	538	1,033
7	Loading 1	30	30	30
8	Loading 2	74	1	20
9	Loading 3	15	15	15
10	Load Idle	9,922	1	327
11	Dumping 1	20	20	20
12	Dumping 2	74	1	20
13	Dumping 3	35	35	35
14	Dump Idle	257,591	1	566
15	Hauler Maintenance 1	259,196	3,601	116,521
16	Hauler Maintenance 2	259,195	3,600	112,193
17	Loader Maintenance	259,184	3,602	119,868
18	Dump Maintenance	259,190	3,633	122,006

表 9: Maintenance interval (hr.) .

#	Event	Max.	Min.	Avg.
1	Hauler Maintenance 1	2,099.2	1.3	467.1
2	Hauler Maintenance 2	2,039.9	0.6	540.6
3	Loader Maintenance	510.6	3.7	100.7
4	Dump Maintenance	529.5	4.1	110.2

4.79 であった。エネルギー消費量は図 2 (b) に示すように、それぞれデスクトップ PC+RDBMS が 0.21、デスクトップ PC クラスタ+Hive/Hadoop が 0.23、エンタープライズサーバ+ストレージ+RDBMS が 2.7、PC サーバクラスタ+Hive/Hadoop が 30.5 であった。図 2 (c) に、それぞれの実装での APEE の比較結果を示す。APEE はの値は、デスクトップ PC+RDBMS が 4.96、デスクトップ PC クラスタ+Hive/Hadoop が 4.33、エンタープライズサーバ+ストレージ+RDBMS が 5.87、PC サーバクラスタ+Hive/Hadoop が 0.16 であった。

これにより、APEE を用いることで実装毎の IT サービスの視点での電力効率を比較することが可能であることが示され、電力効率を考慮した IT サービスの実装が可能となる見込みを得ることができた。

#### 4.3 PC サーバクラスタの挙動調査

APEE により異なる実装間での IT サービス視点での電力効率の違いを比較できることを示したが、図 2 (c) に示すように PC サーバクラスタ+Hive/Hadoop 構成の APEE は他の構成の APEE と比較して著しく低い。これは、図 2 (a) に示すように、同構成のアプリケーションアウトカムの値が、コア数から想定される値と比べて著しく低いことが原因である。そこで、同構成の挙動について調査を行った。その結果を図 3 及び図 4 に示す。

図 3 は 128 台の PC サーバクラスタの、クエリ実行中のノード毎の CPU 使用率の推移である。ここでの値は%user と%system の合計値である。図から分かるように、ある一つのノード (midori004) のみ CPU 使用率の高い状態が続いているが、これによりクエリの応答時間が劣化したことが分かる。なお、CPU 使用率が 50% となっているのは、ノード当り 16 コア中 8 コアのみを Spark のエグゼキュータに割り当てたためである。

次に、図 4 にクエリ実行時に各ノードに割り振られた Apache Spark のタスク数を示す。図から分かるように、ある一つのノード (midori004) にのみタスクが集中していることが分かる。このノードは CPU 使用率の高い状態が長く続いたノードと同一である。タスク一つのノードに集中した原因は、Spark job の中に特定の分割キーを対象とするものがあり、その特定のパーティショ

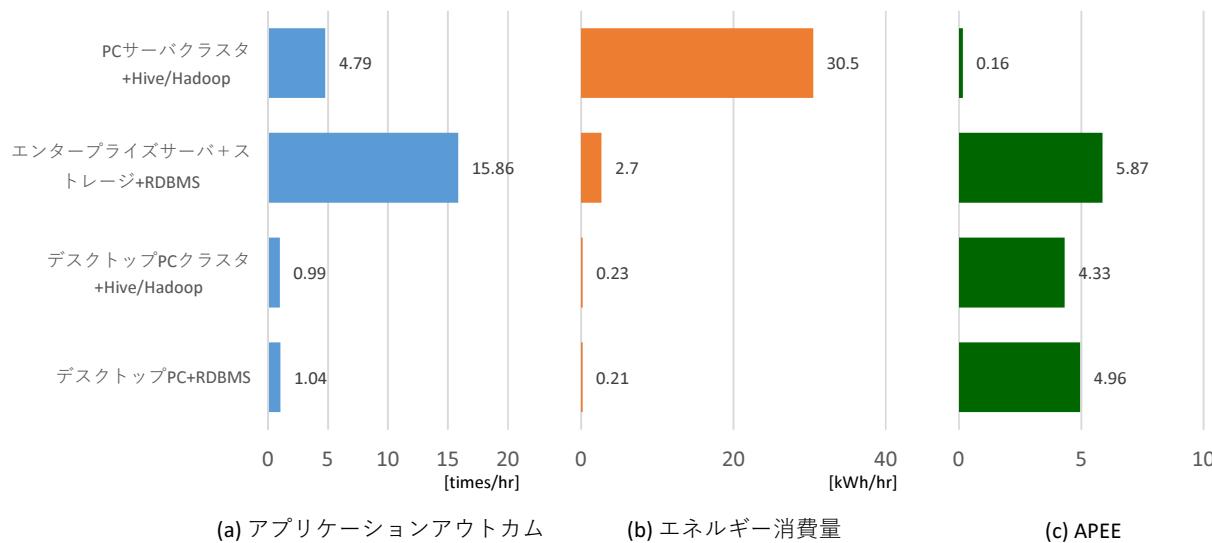


図 2: エネルギー効率の初期評価結果.

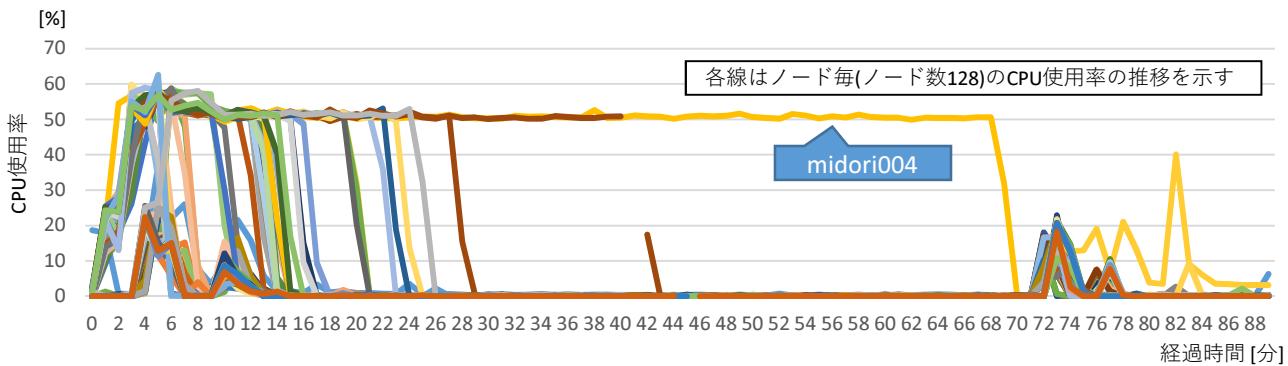


図 3: ノード毎 CPU 使用率推移.

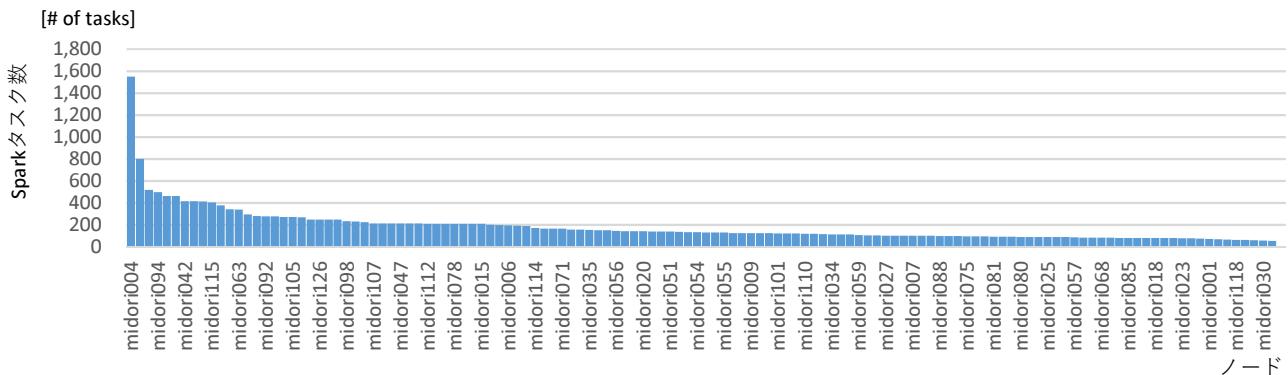


図 4: ノード毎 Spark タスク数.

ンを格納しているノードに処理が集中したためと考えられる。これによりアプリケーションアウトカムが想定ほど伸びず、結果 PC サーバクラスタの APEE が悪くなったと考えられる。

## 5. 考察

本章では、RDBMS 構成と Hive/Hadoop 構成それぞれで、ポテンシャルを最大限に引き出した場合どの程度まで APEE を向上できるのかについて考察する。これらの考察結果は、今後 APEE の目標値を決定する上での参考とすることが可能である。

### 5.1 APEE の推定

まず我々は、前章での計測結果を用いて、APEE がどの程度まで向上できるのかを推定した。APEE の値はクエリに求められる性能により変化するので、ここではクエリの応答時間の目標値を 60 秒として見積を行った。

#### 5.1.1 RDBMS 構成のパラメタ見積り

まず RDBMS 構成で性能要件を満たすために必要となるコア数及び HDD 数を見積る。これにはエンタープライズサーバ+スト

表 10: RDBMS 構成のクエリの特性。

Item	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
# of read record (K)	864	6,016	864	864	11,872
read size (MB)	26	367	26	26	362
response time (s)	14.6	0.9	4.1	70.3	59.7
read type	scan	scan	scan	scan	index access
read throughput per core (KB/s)	77	18,342	277	16	-
# of processed recode per core	-	-	-	-	8,293
required core #	6	1	1	29	24
required HDD #					256

表 11: Hive/Hadoop 構成のクエリの特性。

Item	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
read size (MB) (w/ partition)	32	244	309	309	221,610
read size (MB) (wo/ partition)	11,337	1,029	110,805	221,610	221,610
# of processed recode per core	1	1	1	1	352
required core # (w/ partition)	6	1	1	29	24
required HDD # (w/ partition)	1	1	1	1	88

トレージ+RDBMS の計測結果を用いた。表 10 に、クエリ毎の特性を示す。表から分かるように、クエリはスキャン系のクエリ (Q5-8) と索引を使ったランダムアクセスを行うクエリ (Q9) に大別される。前者のコア当りの read 性能は 16 KB/s から 18,342 KB/s である。ばらつきが大きいのは演算処理の負荷がそれぞれ異なるためである。後者のコア当りのレコード処理件数は 8,293 件であった。この結果から、RDBMS 構成で前述の 60 秒の性能要件を満たすためには、コア数は 29 個必要であることが分かる。また、Q9 の応答時間が約 1 分であることから必要な HDD 台数はエンタープライズサーバ+ストレージ+RDBMS の構成と同じ 256 台と見積れる。

### 5.1.2 Hive/Hadoop 構成のパラメタ見積り

次に Hive/Hadoop 構成で前述の性能要件を満たすために必要なコア数及び HDD 数を求めた。これには、まずデスクトップ PC クラスタ+Hive/Hadoop 構成での実測値よりコア当りの read 性能と HDD 当りの read 性能を求め、表 11 に示すクエリ特性と合わせて必要な CPU 数及び HDD 数を計算した。計算の結果、必要コア数は 352、HDD 数は 88 であった。

### 5.1.3 消費電力量の推定

次に、前節で求めた CPU コア数及び HDD 数より、RDBMS 及び Hive/Hadoop 構成に必要な機器の消費電力を推定した。

#### 1. RDBMS 構成

RDBMS 構成では、サーバとストレージの構成を、それぞれ 29 コアエンタープライズサーバと 256 台の HDD を持つストレージとした。サーバの消費電力が CPU 数に比例するとした場合、別途計測した 48 コアのエンタープライズサーバの消費電力は約 0.29kW であったことからサーバの消費電力は約 0.15 kW と見積めた。次にストレージの消費電力であるが、これは前章の計測で用いたストレージと同等であることからその消費電力は 2.44 kW と推定できる。これらの結果から、RDBMS 構成の一時間当たりの消費電力量は 2.59kWh/hr と計算できた。

#### 2. Hive/Hadoop 構成

次に、Hive/Hadoop 用構成の消費電力量を計算する。Hive/Hadoop 構成では 352 コア、88 HDD が必要であるが、これは 4 章の比較で用いた HADB 用のデスクトップ PC (16 コア、4HDD) 16 台分に相当する。HADB 用デスクトップの消費電力は 0.21kW であったことから、Hive/Hadoop 構成での一時間当たりの消費電力量は 4.6 kWh/hr と計算できた。

#### 5.1.4 アプリケーションアウトカムの推定

表 10 の処理件数・データ処理量とコア数・HDD 数から、RDBMS 構成の 5 クエリの合計応答時間は約 126.2 秒と計算できた。これより RDBMS 構成のアプリケーションアウトカムは 28.5 と計算できた。また、表 11 のデータ処理量とコア数・HDD 数から、Hive/Hadoop 構成のクエリ応答時間はパーティション有りの場合で約 60.3 秒と計算できた。これより Hive/Hadoop 構成のアプリケーションアウトカムは 59.7 と計算できた。

#### 5.1.5 APEE の推定

前節までの一時間当たり消費電力量とアプリケーションアウトカムより APEE を計算すると、RDBMS 構成、Hive/Hadoop 構成それぞれ、 $28.5/2.59 = 11.0$ ,  $59.7/4.6 = 12.3$  と計算できた。

#### 5.2 APEE の改善

前節での見積りはストレージに HDD を使用した場合のものであるが、近年ストレージの主流となりつつある SSD を用いることにより、消費電力量をさらに削減でき、APEE を大幅に改善できると考えられる。そこで、我々はストレージに SSD を用いた場合の APEE を見積った。見積りに使用した SSD は、RDBMS 構成がエンタープライズで用いられる SSD であるインテル®SSD DC P4600 シリーズ、4.0TB (ランダムリード 225,000 IOPS, read 時 9.6W, アイドル時 5W 未満), Hive/Hadoop 構成が安価なデスクトップ用 SSD であるインテル®SSD Pro 7600p シリーズ (3230MB/s, アクティブ時 50mW, アイドル時 25mW) である。

RDBMS 構成、Hive/Hadoop 構成それぞれについて、ストレージをこれらの SSD に置き換えた場合、RDBMS 構成、Hive/Hadoop 構成とも SSD 数は 1 台である。これらの構成での一時間当たりの消費電力量は RDBMS 構成が 0.157 kWh, Hive/Hadoop 構成は 1.9 kWh/hr となった。

これらの結果から、RDBMS 構成、Hive/Hadoop 構成それぞれの APEE は 181.5, 31.4 と計算できた。この結果は、ストレージを SSD に置き換えることにより、IT サービスの視点でも大幅に電力効率が向上できることを示している。

### 6. 関連研究

RDBMS と NoSQL の比較としては、これまで主に性能比較に関する研究が報告されている。例えば文献 [16] では、MySQL と MongoDB を用いて IoT ビッグデータに対する CURD 処理の性能を比較している。また、文献 [17] では、Yahoo! Cloud Serving Benchmark (YCSB) を用いて RDBMS と MongoDB を、文献 [18] ではモバイルアプリケーションを用いて MongoDB と PostgreSQL を比較している。文献 [19] では、複数の NoSQL について、性能やスケーラビリティ等複数の指標で評価を行っている。

産業向け標準ベンチマークとしては、例えば TPC-H [22, 11] や TPC-DS [12, 23] が、Transaction Processing Performance Council (TPC) により開発されている。近年ではビッグデータシステムをベンチマークリングするためのツール [24, 25] の提案や、ハードウェア・OS 及び商用の Hadoop File System API を計測する TPC Express Benchmark for Hadoop System (TPCx-HS)

[26] がリリースされている。また、NoSQLに対するベンチマークとしては Yahoo! Cloud Serving Benchmark [27] が広く知られている。我々が使用した産業ビッグデータアプリケーションモデルは、バックエンドオフィスのみならず、オペレーションマネージャや現場の制御/操作に関するクエリも含んでいる。

エネルギー効率の比較の研究では、近年では仮想化環境やクラウド環境での比較が報告されている。文献[20]では、異なるワークロード、ハイパバイザ、サーバの組合せ毎の性能とエネルギー消費を比較し、同一サーバ・ワークロードであってもハイパバイザによって電力・エネルギー特性が異なることを示している。文献[21]ではクラウドにおけるHPCのスケジューリング方式の電力効率について比較している。

## 7. おわりに

本研究では、産業ビッグデータアプリケーションモデルを、種類の異なるIT機器及びデータ処理ソフトを用いて実装し、その性能及び消費エネルギーを計測した。そして、それら異なる実装間のエネルギー効率を Application Platform Energy Effectiveness (APEC) を用いて比較できることを示した。また、RDBMS構成、Hive/Hadoop構成でのポテンシャルが最大限に引き出されたと仮定した場合の APEC の推定を行うとともに、ストレージに SSD を用いることにより、APEC を大きく改善できる見込みがあることを示した。

これにより、産業ビッグデータアプリケーションモデルが IoT システムのデータベース周辺の実装の性能・消費エネルギー比較に使用できること、及び APEC を用いることで、アプリケーションの実装の差異によるエネルギー効率の違いを評価できることを確認した。この結果、ITサービスの性能とエネルギー効率の双方を考慮した実装の選択が容易にできるようになり、ITサービスの性能を大幅に損なわないデータセンタのエネルギー効率向上への貢献が可能となると期待される。

## 【謝辞】

本研究の一部は、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の委託業務「エネルギー・環境新技術先導プログラム／革新的な省エネルギー型データベース問合せコンパイラの研究開発」及び「IoT 推進のための横断技術開発プロジェクト／先進 IoT サービスを実現する革新的省エネルギー型ビッグデータ基盤の研究開発」の結果得られたものです。

## 【文献】

- [1] A. Shehabi 他, United States Data Center Energy Usage Report, LBNL-1005775, Ernest Orlando Lawrence Berkeley National Laboratory, <https://eta.lbl.gov/publications/united-states-data-center-energy>, 2016.
- [2] FEMP Data Center Program Overview, U.S. Department of Energy, [https://energy.gov/sites/prod/files/2016/07/f33/dc\\_improvement.pdf](https://energy.gov/sites/prod/files/2016/07/f33/dc_improvement.pdf), 2016.
- [3] N. Nishikawa, et.al., Application Sensitive Energy Management Framework for Storage Systems, IEEE Transactions on Knowledge and Data Engineering, Volume 27, Issue 9, pp.2335–2348, 2015.
- [4] 早水他,ストレージ消費電力特性に基づく関係データベース演算子の省電力指向コストモデル, 第9回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM 2017) , G1-3, 2017.
- [5] Information technology - Data centres - Key performance indicators - Part 2: Power usage effectiveness (PUE) , ISO/IEC 30134-2:2016, 2016.
- [6] Information technology - Data centres - Key performance indicators - Part 3: Renewable energy factor (REF) , ISO/IEC 31034-3:2016, 2016.
- [7] Information technology - Data centres - Key performance indicators - Part 4: IT Equipment Energy Efficiency for servers (ITEEsv) , ISO/IEC 30134-4:2017, 2017.
- [8] 五十嵐他, アプリケーションを含めたITサービスのエネルギー効率指標の提案, 第10回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM 2018) , C7-3, 2018.
- [9] U. Dayal, et.al., An Approach to Benchmarking Industrial Big Data Applications, Big Data Benchmarking: 5th International Workshop, WBDB 2014, 2014.
- [10] Apache Hadoop, <http://hadoop.apache.org/>, 2017.
- [11] Transaction Processing Performance Council (TPC) , TPC-H benchmark specification, <http://www.tpc.org/tpch/>, 2008.
- [12] R. O. Nambiar, et.al., The making of TPC-DS, in Proc. of the Int'l Conference on Very Large Data Bases (VLDB) , 2006, pp. 1049–1058.
- [13] 高速データアクセス基盤 Hitachi Advanced Data Binder プラットフォーム, <http://www.hitachi.co.jp/products/it/bigdata/platform/data-binder/>
- [14] Apache Hive, <https://hive.apache.org/>, 2017.
- [15] Apache Spark, <https://spark.apache.org/>, 2017.
- [16] J. Y. Seo, et. al., Performance Comparison of CRUD Operations in IoT based Big Data Computing, International Journal on Advanced Science Engineering Information Technology, Vol.7, No. 5, pp.1765–1770, 2017.
- [17] A. Floratou, et. al., Can the Elephants Handle the NoSQL Onslaught?, Proceedings of the VLDB Endowment, Vol. 5, No. 12, 2012.
- [18] M. Fotache, et. al., NoSQL and SQL Databases for Mobile Applications. Case Study: MongoDB versus PostgreSQL, Informatica Economica, 17 (2) , pp.41–58, 2013.
- [19] S. Venkatraman, et. al., SQL Versus NoSQL Movement with Big Data Analytics, International Journal of Information Technology and Computer Science, 2016, 12, pp.59–66, 2016.
- [20] C. Jiang, et. al., Energy Efficiency Comparison of Hypervisors, 2016 Seventh International Green and Sustainable Computing Conference (IGSC) , 2016.
- [21] S. Goyal, et. al., Experimental Comparison of Three Scheduling Algorithms for Energy Efficiency in Cloud Computing, 2014 IEEE International Conference on Cloud Computing in Emerging Markets, 2014.
- [22] M. Poess, et. al., New TPC Benchmarks for Decision Support and Web Commerce, SIGMOD Record, vol. 29, no. 4, pp. 64–71, 2000.
- [23] M. Poess, et.al, Why you should run TPC-DS: A workload analysis, in Proc. of the VLDB Endowment (PVLDB) , pp. 1138–1149, 2007.
- [24] T. Rabl, et.al., Big Data Generation, in Specifying Big Data Benchmarks, ser. LNCS. Springer, vol. 8163, pp. 20–27, 2014.
- [25] Y. Zhu, et. al., BigOP: Generating Comprehensive Big Data Workloads as a Benchmarking Framework, in Database Systems for Advanced Applications, ser. LNCS. Springer, vol. 8422, pp. 483–492, 2014.
- [26] Transaction Processing Performance Council, TPCx-HS, [www.tpc.org/tpcxhs/](http://www.tpc.org/tpcxhs/), 2015.
- [27] Yahoo Cloud Serving Benchmark, <https://research.yahoo.com/news/yahoo-cloud-serving-benchmark/>, 2010.

- [28] 三輪, 世界中で稼働する建機を遠隔モニタリングする KOM-TRAX, セキュアな IT が創るつながる新産業創出セミナー, [http://www.chubu.meti.go.jp/b34jyoho/shiryo/20140214\\_yugosecurity\\_seminar/20140214\\_komatsu.pdf](http://www.chubu.meti.go.jp/b34jyoho/shiryo/20140214_yugosecurity_seminar/20140214_komatsu.pdf), 2014.

**西川 記史 Norifumi NISHIKAWA**

(株) 日立製作所 研究開発グループ主任研究員。1991 年神戸大学大学院計測工学専攻修了。同年株式会社日立製作所入社。2013 年東京大学大学院情報理工学系研究科電子情報学専攻博士課程修了。同年博士（情報理工学）。データベースシステムに関する研究に従事。本会、情報処理学会各会員。

**高田 実佳 Mika TAKATA**

Hitachi America, Ltd. Research & Development Division Researcher. 2009 年早稲田大学情報理工学専攻修了。2012 University of Georgia, Bioinformatics MS 取得。同年株式会社日立製作所入社。データ処理に関する研究に従事。人工知能学会、情報処理学会、IEEE 各会員。

**茂木 和彦 Kazuhiko MOGI**

(株) 日立製作所 横浜研究所主管研究員。1992 東京大学工学部電気工学科卒業。1997 同大学院工学系研究科情報工学専攻博士課程修了。博士（工学）。1998 (株) 日立製作所 システム開発研究所。データベースシステムの研究に従事。本会、情報処理学会各会員。

**早水 悠登 Yuto HAYAMIZU**

東京大学生産技術研究所特任助教。2009 年東京大学工学部電子情報工学科卒業。2014 年同大学院情報理工学系研究科電子情報学専攻博士課程単位取得満期退学。同年博士（情報理工学）。日本学術振興会特別研究員 DC2 を経て現在に至る。データベースシステムに関する研究に従事。本会、情報処理学会各会員。

**合田 和生 Kazuo GODA**

東京大学生産技術研究所特任准教授。2000 年東京大学工学部電気工学科卒業。2005 年同大学院情報理工学系研究科電子情報学専攻博士課程単位取得満期退学。同年博士（情報理工学）。データベースシステム、ストレージシステムの研究に従事。本会、電子情報通信学会、情報処理学会、ACM, IEEE, USENIX 各会員。

**喜連川 優 Masaru KITSUREGAWA**

東京大学生産技術研究所教授、国立情報学研究所所長。1983 年東京大学大学院工学系研究科情報工学専攻博士課程修了、工学博士。2013 年 6 月～2015 年 5 月情報処理学会会長、2018 年 6 月より本会会長。データベース工学の研究に従事。情報処理学会功績賞、電子情報通信学会業績賞、ACM SIGMOD E.F. Codd Innovations Award、紫綬褒章受章、C&C 賞受賞。電子情報通信学会、情報処理学会、ACM, IEEE 各フェロー。